

「羽包み(はくくみ)」

第14号（特別記念号） 平成28年3月1日発行

自立援助ホーム「湘南つばさの家」

〒253-0022 神奈川県茅ヶ崎市松浪 1-12-17

TEL・FAX 0467-58-6260 shonan-tsubasa@marble.ocn.ne.jp

〔郵便局での振込みは〕 ゆうちょ銀行 振替口座 00200-5-81277 自立援助ホーム 湘南つばさの家

〔銀行からの振込みは〕 ゆうちょ銀行 店名：029 当座 0081277 自立援助ホーム 湘南つばさの家

いのちを燃やす

ホーム長 前川 礼彦

湘南つばさの家は開設 10 周年を迎えました。

平成 18 年に神奈川県域初めての自立援助ホームとして開設し、家庭で生活出来ない少年たちにとっての新たな暮らしの場として、計 28 名の就労自立を支えてきました。

これもつばさの家を支えて下さった支援者皆様のお力添えがあって、今日までホームを維持することが出来ました。心からの感謝を申し上げます。

思えば、生きることに傷ついた少年たちの力になりたいと、この世界に飛び込んで 20 数年。人が生きていくに一番大切なことは、やはり「人の存在」だと感じてきました。人生は自身の心と対峙し付き合いながらも、人がいてこそ磨かれて成長していくものです。人に喜び、人に傷ついてもいいますが、人生の潤いは人なしでは成り立ちません。

自身の人生は誰の為で、どの様な為にあるのだろうか。永遠ではなく限られた年月、その間どんな生き方を選ぶことも出来ます。置かれた環境に折り合いつけて生きることも、人の為に尽くすことも、自分の幸せを追求することも、本来は自由で自分が決めることです。長い人生、何をして過ごすか。自身の「いのちの時間」を費やして、何に懸けるか。

詰まるところ、人は自らの幸せを追求して生きるのでしょうか。人のために尽くすのは美談として素晴らしくも映りますが、そこには自らが幸せに感じられることが何より大切です。人の為に何かをすることが心から行いたいことであるから、それが相手に伝わり、喜んでもらえる。そのやり取りが自身の心に「幸せの泉」を湧き起らせるのです。犠牲やするべき理想で心が伴わなければ相手に伝わり真には喜んでほもらえませんが、人の存在を大切にするということは、自らの心が相手に伝わるということをお忘れではありません。

私は今一度振り返ります。自身のいのちを燃やしてしたいことは何か。人生を通して心から行いたいことが、自らの真の幸せとして、社会に貢献をしていけることであろうか。

湘南つばさの家を通して、出逢う人たちが幸せな人生を歩めるよう、どうかこれからもお付き合い頂けましたら幸いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。



つばさの家応援団 ～支援者紹介（その10）～

当時ホームの開設準備をしていたとき、私には人脈もお金も建物もなく、開設には「社会福祉法人の後ろ盾があること」が条件でもありました。紹介の紹介で人の繋がりを頂き、ホーム開設に大きなご尽力を頂いたのは当法人の理事であり、当時の児童福祉施設協議会会長であった山川保先生と、現会長の鶴飼一晴先生でありました。鶴飼先生は困っている人にはどんな人でも一肌脱ぐような人情と器の広い方であり、当時突然現れた私のような若輩者を受け止めて下さいました。そして山川先生とお力添えを頂き、神奈川県域に初めての自立援助ホーム開設が実現されたのです。今でもこのお二方の先生には感謝の念が絶えません。この度は鶴飼先生から玉稿を賜りました。厚く御礼申し上げます。

湘南つばさの家、設立10周年によせて

神奈川県児童福祉施設協議会会長
社会福祉法人唐池学園理事長
鶴飼 一晴

湘南つばさの家、設立10周年おめでとうございます。

正直、「もう、10年過ぎたの？」という感じです。しかし、前川夫妻にとっては「幾星霜……、風雪いかに厳しくも……。」という思いではなかったでしょうか。たぶん、今でもこの思いはかわらないでしょうが……。

思い出します。10数年前のことを。設立の思いをよせて、初めて氏とお会いした時のことを。

「自立援助ホームという仕事を神奈川で立ち上げたい。ぜひ、協力をしていただきたい。」と、氏の熱意がひしひしと伝わってきました。しかし、私はその時に、失礼ながら、言わせてもらいました。「前川さんの思いはわかるけれど、奥さんはどうなんだ？。むしろ、奥さんの方がその気がなければこのような仕事はうまくいかないよ。」と、そして「もし、よかったら奥さんともお目にかかりたい。」と。後日、奥様とお目にかかり、私の失礼極りのない疑心は杞憂に終わりました。それは、この10年間の夫妻の実践を見れば論を待たないでしょう。

この仕事はその時代が求めるニーズに対していかに隙間なく支援できるかに掛かっています。

今後も「自分に喜びを見出せたか、他者に喜びをもたらしたか」の心根で取り組んでいかれることを期待し、ご祈念申し上げます。





つばさの家応援団 ～支援者紹介（その11）～

つばさの家を立ち上げる時に、佐藤さんには支援会の立ち上げ、通信発行、支援者のご紹介、運営基盤のノウハウなど、本当に様々なお力添えを頂きました。我々が疲れてきたときは、定期的にお会いして、運営への助言、気持ちを受け止めて下さりと、物心ともに支えられました。どれだけ救われたか分かりません。お陰様で今日に至るまでホームを存続出来た事、佐藤さんの出逢いに心からの感謝を致します。

前川さんのこと

佐藤 寛（元大学教授・研修講師・執筆業）

前川さんと知り合ったのは十数年前、日本交流分析協会の勉強を通してであった。当時は控えめな態度の好青年という印象であった。

しばらくして、その前川さんが少年のための自立支援の施設を建設したいという。

聞いてその困難さを想像し、ためらいを感じた。何事も立ち上がりには想像を絶する大きなエネルギーがいる。まずは援助を募らなければならない。コストをかけずに支援を募るにはどうしたらいいか、前川さんといっしょに考えることにした。今なら、クラウドファンディングとかさまざまな手段が考えられるが、当時は「印刷物による告知」しか考えつかなかった。『羽包み』の誕生である。また知人から知人へと口伝てで支援者を募集した。スーパーへ期限の迫った食品をもらいたいといっしょに陳情に行ったこともあった。前川さんに様々なところで講演いただくよう情報提供したこともある。

その前川さんご夫妻が、多くの艱難辛苦に耐えて少年たちと寝食をともにして活躍し続けているということは感激に耐えない。感涙滂沱である。「国の一隅を照らすを国宝という」が、まさにご夫妻は10年にわたって行政の灯火に遠い暗黒の地を照らし続けてきたのである。ご夫妻こそ菩薩道の体現者・行者である。南無観世音大菩薩！

ちなみに筆者も孤児である。両親の顔を知らない。幼少年時代は頭上を「この子さえないなれば。この子は馬鹿だから」という養育者や債鬼のマイナスの嵐が吹き荒れていた。だから、今でも強い“恐れ・回避型愛着障害”がある。人が怖い。筆者の場合は、成人するまで高名な弁護士父子が愛情をもって訴訟弁護を引き受けてくれた。今日まで生きてくることができたのは、本当にお他人さまのお蔭である。

少年たちに伝えたい。

- 1) 自らを灯明とせよ。自分だけを頼りにして生きろ。すべて自己責任である。
- 2) 意識して心身の安全基地をもて。前川寮長ご夫妻は頼るにたる安全基地である。
- 3) 成人まで我慢して他の人に負けない一芸を磨け。必ず自分に見合った職業がある。
- 4) 学問はないよりあったほうがいい。騙されないようにせよ。ゲームをやる暇があったら本を読め。
- 5) 大志は必ずこの世で実現する。ソフトバンクの孫社長の生きざまに学べ。
- 6) 経営者を志せ。自分が大成したら、同じような境遇の少年たちの庇護者となれ。



つばさの家応援団 ～支援者紹介（その12）～

地域で暮らすホームにとって、地域の理解は欠かせません。ホームの開設に苦慮していたとき、ご紹介頂いた小野江さんは、地域での福祉、教育、町づくり等様々な活動をされている方でした。「この地域は福祉に理解ある温かい地域です。」とご説明を頂きました。

どれだけ広域に理解が広がっていったとしても、地元の理解が基盤となります。人の育ちは地域の環境に包まれる。海の近くに拘ってホームを探していたとき、この地域とのご縁を頂きました。少しずつですが、地域の自治会、各協議会などに参加し、支援を頂くだけでなく、地域に貢献したいと思います。この地域に住まわせて頂いていることに感謝致します。

思いを繋げるために

小野江達人

自立援助ホーム湘南つばさの家開設10周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

ホーム長の前川さんとの出会いは、白十字会林間学校の先生の紹介からでした。湘南つばさの家の開設より少し前に遡ります。前川礼彦さんという方で都内の自立援助ホームに勤務されていて、神奈川県で、茅ヶ崎市で、そして出来ればこの松浪地区で自立援助ホームを立ち上げたいと切望されているとのことでした。

お会いして先ず驚いたのは、想像していたよりはるかに若い御夫婦だったことです。自立援助ホームの概要については、お会いする前に、『施設は自前で探すこと』『運営予算は一般家庭収入並程度』等々と説明を受けておりましたので、ご自身の生活がひと段落して、次のステージを自らの運営でと考える方なんだろうと想像しておりました。

ところが目の前に現れたお二人は、とても若くてとても優しそうでちょっと頼り無さそうな（失礼）印象の、小柄で華奢な御夫婦だったのです。まだまだ人生はこれから、本来なら自分たちの生活を優先した人生設計を行ったり、裕福になりたいと願う事が当たり前だと思います。なぜこんな大変な道を歩まれるのか敬服するというより、不思議な思いを抱いた記憶があります。

前川さんは、開所してから半年後の支援会通信「羽包み」の中で、『家庭の事情で若くして社会的自立を強られる少年たちを支え、彼らの心の叫びを誰かが社会へ代弁しなければと、私は自身の生き方として自立援助ホームを開設した』と言われました。その志しの高さや強さに頭の下がる思いです。この10年の時を刻むために、涙ぐましい努力と忍耐があった事だと思います。心から感謝申し上げます。

今、多くの支援が『湘南つばさの家』に寄せられているとお聞きします。人を人が支え合う事が、優しく温かい支援のサイクルを生み出します。『湘南つばさの家』を中心にした一つの波が、他の多くの波を呼び込み、さらなる支援のサイクルを生み出し、それが誰もが住みやすい、温かい街づくりにつながっていくのだと思います。私たち近隣住民のほんの少しずつの思いやりのおすそ分けが松浪地区を選んで良かったと思われるように、温かい支援を継続していただける事を切望します。



つばさの家応援団 ～特別寄稿～

私が自立援助ホームの世界で最も尊敬する方が、龍尾和幸さんです。龍尾さんは京都にある自立援助ホーム「東樹」の元ホーム長であり、長年に渡り東樹で先駆的な実践を展開されて来られました。ホームは哲学で溢れた素晴らしい実践をされており、龍尾さんの理念と魅力に惹かれ、私は何度も京都まで通いました。たくさんの教えとヒントを頂き、この仕事の魅力と活力を頂きました。つばさの家を立ち上げるとき、そして自身の実践に躓いたとき、心の中にいたのは龍尾さんの存在でした。龍尾さんの自立援助ホームでの実践を糧として、つばさの家も魅力のあるホーム作りを目指していきたいと思います。

「立つ」だけでなく「立ちきる」こと

児童養護施設 新天地育児院
副院長 龍尾和幸

自立援助ホーム「湘南つばさの家」開設 10 周年を迎え、お目出度うございます。ご夫妻夫々が東京の自立援助ホーム「新宿寮」に始まり、ご一緒になられてからは二人で強い志を持って湘南の地に自立援助ホームを開設されたことに敬意を表します。柔和で優しく、且つ一本の芯を持ったご主人と、腹が座って動じない奥様との名コンビの成せる技ですね。

しかもご夫妻はまだ若い。私が京都で東樹を開設した年齢が今のご夫妻の年齢ですから、今後も 20 年～30 年携われるわけです。是非、自立援助ホームに拘り、その質を更に深め、地域に於ける理想の青少年ホームを実現して欲しいものです。一つの世界に拘ることは自分が持てる他の能力を捨てることではなく、持てる他の知識と能力もその一点に集約することです。深く…更に深く掘り下げて、質をもっと…もっと深く掘り進めてゆくことです。

織物の世界でもそうですが、1 枚の反物を織る為には先ず縦糸を何百本、何千本と張り、そして横糸を通してゆくわけです。私たちは良く支援の場面で「点から線に、線から面に」と言いますが、線とは縦糸が先で横糸は後で通すのを忘れないことです。

結局その姿勢が青少年個々への支援でも形を変えて現れてきます。「子どもの側に立つこと」と人は良く口にしますが、本当は「子どもの側に立ちきる」ことが大切なのです。では、それは如何に違うのか。「立ちきる」為には、自分が関わればこの少年はもっと立派になるという強い信念を持ち、持てる能力の全てを集中させて、まだ気に入らない、まだ気に入らないと思いながらやり抜くことです。この子はこんなものだと思えば、それで終わってしまうのです。簡単に終わってしまっはいけないのです。

「立つ」とは一時的な関わりです。「立ちきる」とは地域に根を張った私たちが「これでもか、これでもか」と歯を食い縛り、その少年の人生と向き合うことなのです。



支援の継続をお願いします!

いつもご支援ありがとうございます。自立を目指す少年たちを支えていくためには、皆様からのご支援の継続が欠かせません。ご支援をして下さる方は当支援会の会員（無料）として、今後もつばさの家の活動報告をさせていただきます。

緊急支援！！ 大学進学を目指す少年に経済的なご支援を！！

現在ホームに入居している少年は、日々働きながら、この1年受験勉強を両立させてきました。将来は教師になりたい夢を抱き、仕事で疲れているのに毎日勉強に励んできました。学力も伸び、合格も目前という所まで来ています。この3月にはホーム退居も予定しており、アパート暮らしと仕事を両立しながら、自活する生活費も賄い、合わせて300万円もの学費を捻出しなくてはなりません。自立援助ホームは活用できる奨学金が児童養護施設よりも乏しいのが現状です。本人のせいではなく、生まれ育った環境により、経済的理由が原因で進学を諦めてしまわなければならない現状。国はその様な少年たちに新たな奨学金も検討していますが、実現にはもう少し時間がかかります。奨学金の問題は多額の借金を抱えて社会人として生きていかねばならないという事です。生活、就労を維持しなければ、学業を修学することはおろか、生活も破綻するリスクが高いことでもあります。

この様な状況を改善するため、また少年たちには夢や希望を諦めない人生を送ってほしいため、つばさの家では支援者皆様からのご寄付を依頼させていただきます。この少年だけでなく、ホームには次に進学を希望する少年もいます。どうかお力添えを頂きましたら幸いです。

目標：一人1万円×100人！！（金額はそれ以下でもそれ以上でも結構です！）

※貸与ではなく、給付として少年の学費の一部に充てさせていただきます。

（振込み口座は表紙に記載しています。寄付控除の領収書も発行できます。）

物品のご支援

いつもご支援をありがとうございます。ホームでは食品に関するご支援を継続募集中です。現在ホームで切らしているものは「サラダ油」です。毎日大人数の食事を用意するために、油は不可欠です。また「野菜や果物」は何でも助かります。

生活用品では食器用洗剤、洗濯洗剤、トイレトーパー、その他生活消耗品は何でも助かります。また文具、おもちゃ、マンガ、雑誌、ゲームソフト、楽器やスポーツ用品などがあると嬉しいです。定期的にフリーマーケット等にも出店しておりますので、バザー用品も助かります。

（編集後記）

通信の発行が不定期になり申し訳ございません。ご寄稿頂いた各支援者の方々、通信を楽しみに待ってくださっている方々に深くお詫びを申し上げます。

○発行責任者：湘南つばさの家 前川礼彦 ○編集：川島さよ子様（支援者）